

4月当初から、二つのスピーチをするという、宿題を提出しなければいけない生徒に戻ったような気分で、課題に取り組むうちに、桜は散っていきました。低温だったせいか、比較的桜は長持ちしましたが、春のおとづれと共に、アッと言う間に木々が緑の新芽を芽吹かせ、風の五月が足音を荒げて近づいたようです。せっかく咲いた鉢植えの藤も吹きまわられて儂い命を懸命に生きています。

4月中旬に、熊本県から大分県にかけて活断層が裂けて、激震が起こり、大惨事となりました。テレビの報道を見て、息を呑むばかりです。私の周辺には喜びでいっぱいの人々がいるのに、各地に悲しみ、苦しむ方々がおられます。気持ちが引き裂かれるようです。ちょうど、活断層が大地を一直線に走って、左右にずれたように。安全を祈ること、支援金を送ることしかできません。



ルターが、「たとえ明日世界が滅亡しようとも、今日私はリンゴの木を植える。」という名言を残していることを思い出して、新しい命への希望を持って、今生かされている場を大切にしたいと、いつも思っています。そういうわけで、昨年11月ごろに切り花で頂いた四季咲きのバラを挿し木したところ、3本生きて、蕾も付き、とうとう「こんにちわ！」と咲いてくれました。とても香りのいいバラです。この

バラは、元の持ち主が結婚に際し、母上から贈られた苗木でしたから、50年以上命をつないできたのです。丈夫に大きく育てて、四季それぞれに楽しみたいと思っています。私のバラの挿し木コレクションのニューフェイスとなりました。

フェイスと言えば、「顔」ですが、この春一番の顔に関するびっくりポンの事件がありました。エルミタージュのお隣には保育園があります。道を通るとき、園庭で夢中で遊ぶ幼い子供たちが、時々、フェンスに寄ってきて、声をかけてくれます。ある少女が「マリちゃんの名前知ってる？」と自分を指さして尋ねます。「そうネ、マリちゃんでしょ」と答えると「どうして知ってるの？」と不思議そうです。「すぐわかったわ」と言うと「マリちゃん、4歳」と自慢気に年齢を教えてくださいました。「いいなあ、4歳なんて！」と褒めると、すぐにほかの子たちが自分の年齢を教えてくださいました。私は「じゃあ、私はいくつだと思う？」と聞くと、皆、分からないようです。サバを読んで、「100歳よ！」と教えると、みな口ぐちに100まで、120まで数えられると自慢しました。そして、次に、「おじいちゃんなの？おばあちゃんなの？」と尋ねてきたのです。もう、これには超！超！びっくりポン！心で泣きそうになって、「おばあちゃんよ」というと、「おばあちゃんなら、おっぱいがある」といかにも見たそうなので、コートの上から胸のふくらみを見せてあげました。みな、安心して、今度は「誰のおばあちゃんなの？」トモ君とユウ君のおばあちゃんよ」と答えて「じゃあ、バイバイ」と退散しました。幼児にとっては性や年齢などは目に入らず、「誰のおばあちゃんか」という具体的な人間関係が重要なのだと思い知ったことでした。